

文学館だより



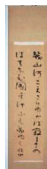
令和 7年 5月 1日
若山牧水記念文学館
TEL 0982-68-9511
文貴 日 高 第109号

=若山牧水生誕140年・若山牧水記念文学館開館20年Memorial Year=

小田加奈子若山牧水を歌う 小田加奈子コンサート開催

若山牧水生誕140年記念／若山牧水記念文学館開館20年記念

小田加奈子若山牧水を歌う 小田加奈子コンサート
ピアノ伴奏 河野浩子



- ◇期 日：令和7年5月25日（日）
- ◇時 間：開場12：30 開演13：00
- ◇会 場：若山牧水記念文学館
- ◇料 金：前売り券1,000円（当日券1,200円）
- ◇問合先：若山牧水記念文学館 TEL 68-9511

座席に限りがあります

お早めに!!

牧水の里のつつじ祭り 今年も賑わいました

4月13日



牧水の里のつつじ祭りも24回を迎え、早朝までの雨も上がり青空広がる行楽日和となりました。文学館は今年も野点会場として開放され、お茶を楽しみ、ゆっくり見学していただきました。また漬物屋梅香工房さんの折り紙ワークショップも初出店?!予想に反して、大人の方々に喜んでいただいているようでした。さらに、イベント会場にて初の試み『若山牧水を知ろうクイズ』を実施し、



- ①「若山牧水の誕生日は9月17日である」
 - ②「日向市駅前のあくがれ広場には『幾山河…』の歌碑が一基だけ建てられている」
- など、〇×クイズを出題しました。生誕140年を機に若山牧水を知る機会になったのだと思います。

- ←こたえ
- ①× 8月24日
 - ②× 二基

講座生募集!! 「短歌実作基礎講座」

4月号に続いて、再度お知らせいたします。

申込締切 令和7年6月6日（金）

令和7年度「短歌実作基礎講座」開催要項

- 1 ねらい みそひともじ
 - (1) 5・7・5・7・7の三十一文字のリズムを知り、短歌に触れる機会をもつ。
 - (2) 短歌実作および鑑賞を通して、短歌の基礎を学ぶ。
 - (3) 歌人若山牧水が東郷町坪谷に生まれたことを知り、「短歌のまち日向」づくりを盛り上げる。
 - (4) 宮崎日日新聞「宮日芸芸短歌部門」等への投稿気運を高める。
- 2 主催
日向若山牧水顕彰会
- 3 アドバイザー
日高尚子氏 日向市在住 「心の花」所属
鈴木睦代氏（補佐） 日向市在住
- 4 開催日程、会場

① 令和7年 7月15日（火）	13:30～16:00	日向市中央公民館
② 令和7年 8月19日（火）	13:30～16:00	若山牧水記念文学館
③ 令和7年 11月11日（火）	13:30～16:00	若山牧水記念文学館
④ 令和8年 1月13日（火）	13:30～16:00	日向市中央公民館
⑤ 令和8年 2月10日（火）	10:00～12:00	日向第一ホテル

詳細は若山牧水ホームページ、文学館だより4月号をご覧ください
ハードルを上げず、短歌に触れることから始めていきたいと思っています。
指折り数え、一緒に短歌を作ってみませんか。
申し込み、問い合わせは若山牧水記念文学館まで。 TEL 0982-68-9511
若山牧水が生まれた「短歌のまち日向」を一緒に盛り上げていきましょう。



第27回若山牧水賞受賞歌人 奥田亡羊さん死去



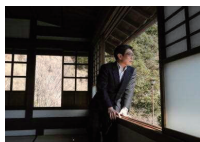
令和4年度の第27回若山牧水賞受賞歌人、奥田亡羊さんが4月11日に亡くなった。若山牧水賞授賞式翌日、坪谷を訪問されて以来の短いおつきあいであった。このご縁はこれからもずっと続くと思っていた。誠実で...多くを語らず...人間味ある...温かな印象の方であった。

奥田亡羊さん、出会いをありがとうございました。
文学館にいただいた作品、思い出の数々、大切にします。

第27回若山牧水賞授賞式翌日、坪谷を訪問された奥田亡羊さん



ご自身の展示の前で



牧水生家二階にて



牧水が生まれた縁側にて



取材に応じて

『三世代のいちごつみ』でも四人の歌人が奥田亡羊さんを詠みつないだ。

No.473/2025年4月17日【啄木】

啄木鳥(きつつき)になってつつけばやわらかく木霊する人亡くして静か

奥田亡羊さんの訃報が届いた。心の花の時評を僕が書いていたとき、送り先が亡羊さんだったのが出会った。何を書いても褒めてくれる、やわらかな人。話しかけた分だけ応えてくれて、でも決して喋りすぎない人。そんな印象だった。もっと話しかけたかった。

顔と名を変えて何度も愛し合い俺たちのいない朝を語ろう(奥田亡羊『花』)

作者/久永草太(ひきながそうた)

No.474/2025年4月18日【木霊す】

また来るね、じゃあね、あしたね病窓に虹が木霊す七つのいろで

変な天気の日だった。強風が吹き、曇って晴れて、雨が降って止んだ。その日、義母のお見舞いに行った。帰り際、それぞれが話しかけて病室を去るとき虹が出ていた。そして、ちょうど一年前の今頃、奥田亡羊さんが香貫山の牧水歌碑で撮った写真をXにあげていた。それを見て私も行きたいと思っていた。それで先週、西伊豆に行った帰りに香貫山に登った。霞んでいて富士山は見え、桜の花が道路にたくさん散っていた。ご冥福をお祈りいたします。

作者/乃上あつこ(のがみあつこ)

No.475/2025年4月19日【七】

七匹の、いや七頭の羊追ひとらへたる人そらにゆきたり

去る十一日に亡くなった奥田亡羊さんの思い出が去来する毎日だ。亡羊とは逃げた羊を追いかけたが道が多くて見失ったという意味の言葉である。奥田さんは一匹どころか七匹をつかまえた。いや、大きな羊だったので七頭というべきだろう。職業や仕事をつぎつぎ変えて、どの仕事にも有能で彼らしさを発揮していた。「空には竜の匂いがした」と『花』の歌集巻頭では歌っていたが、彼には空の竜の血がながれていたのかもしれない。作者/伊藤一彦(いとうかずひこ)

No.476/2025年4月20日【七】

七味振ってひとりの蕎麦を啜るとき眼を濡らしたりかへらぬ人へ

亡羊さんがなくなった。『温泉』の頃からずっと励ましていただいた。宴会などで同じテーブルになると、『温泉』読んだ? 『meal』読んだ? とみんなに話しかけ、おのずからなる応援演説となった。聞かされた方は迷惑だったのかもしれないが、それを横で聞きながら、心の深いところを撫でられているような気持ちになった。まだまだうたの話がしたかった。お酒も飲みたかった。亡羊さんの、おかしな話も聞きたかった。

作者/山下翔(やましたしょう)

牧水先生の一首

折に触れて出会う一首を紹介しています

ねむ

睡たさをこらへてよめる歌なればわが歌の松はひよろひよろの松

ねむたさを こらえてよめる うたなれば わがうたのまつは ひよろひよろのまつ

大正7年5月8日、浜松『花屋』に一泊。「(略)浜松では二十人ほどの人、宿に押し寄せ歌会となる、果てたのは正に一時半、へとへとになってしまった(略)」と喜志子夫人へ手紙を送っている。旅の初日から想定外の展開となった様子が見てとれる。牧水先生には大変申し訳ないが、下の句が素敵すぎて、思わずクスッとしてしまった。